

泉の森 なんでも情報館

2015年 特集-1 (No.18)
発行 しらかしのいえボランティア協議会
エリアマップ作成班

泉の森の“水”と引地川についての なんでも情報館ツアー!!!

泉の森は、水源地を持つ緑豊かな公園で、その流れは引地川となって、太平洋に注いでいます。水源地ってどうなってるの？ 引地川の水ってどう集まって、どのように流れていくの？ 皆さん、泉の森の水にまつわる風景や施設を実際に眺めながら、泉の森をお散歩してみませんか？(距離・所要時間目安はp.10 参照)



① まずは”野鳥観察デッキ”に行きましょう。ここから水源地の”大池”が見えます。水源地は柵に囲まれていて全部は見えませんが、中はどうなってるでしょう？(p.3 参照)



スタートはしらかしのいえ。ここで泉の森の概要を知り、さあ、出発です。

② 昔は水源地に湧く水が大和市内に水道として配られていました。しかし、今は違います。”配水池”の上に立って下にある巨大な水槽を想像してみましょう(p.4 参照)。



途中に引地川水源地の碑があります。



③ 小川の横に水車小屋があり、その隣に小さな田んぼがあります。水車小屋の中はどうなっているのかしら？(p.4 参照)

④ ハツ橋デッキ奥に排水トンネルが口を開け、そこから側溝が延びて引地川に注いでいます。この水はどこから来るのでしょうか？(p.5 参照)。



⑤ カモや鯉が遊ぶしらかしの池。普段ゆったりした景色を見せていますが、台風などの大雨のときは洪水を防ぐ調整池として大事な役割を担っています(p.5 参照)。

⑦ 子供達が遊び、家族や仲間同士でバーベキューをしたり・・・ふれあい広場がゆったりしているのは、さらさら流れる水辺があるからでしょう。昔このあたりはコンクリート護岸で覆われた真っ直ぐな川だったとは！(p.7 参照)。



⑥ 市道を越えると釣堀”草柳園”があります。魚飼養塔に歴史が刻まれており、釣堀に流れる地下水がもうひとつの引地川の水源地。おながが空いたら、園内の食堂も利用できますよ(p.6 参照)。



⑧ 三分一と親水広場・・・ここが終点です。水は流れているでしょうか？(p.6 参照)。

引地川を下って相模湾へ

大和駅へ



(おまけ)

泉の森に源流を発する引地川は、大和市・藤沢市を通り、相模湾まで21.3kmを流れ下っていきます。昔はどぶ川だったのですが、下水道・治水整備と多くのボランティアの皆さんの努力でかなり綺麗な川になっており、川沿いには遊歩道も整備されています。この川をカヌーで下った話を紹介します(p.8, 9 参照)。

チェックポイント①： 野鳥観察デッキから水源地の大池を臨む！

2011年4月16日（土）県・企業庁の許可を得て、永年の念願だった水源地観察会に参加しました。

特報！水源地に入ってみました！

参加者は総勢 27 名、自然観察センター職員：秋山さんの案内で、午前 10 時から午後 3 時まで水源地内を散策。

観察だけでは知り得ない水源地の資料については、県・企業庁寒川浄水場のご協力による情報も併せてご紹介します。

〔水源地の規模〕

1. 昭和 63 年から平成元年の 2 年間で、遊水池（㊟小池、㊟大池、㊟池）周辺約 2.5ha を整備しフェンス（左図参照）を設置した。
2. 池の湧水は、地表より約 1m の深さから湧き出るが、水量の増減があり水位の変化と引地川流量も含めて定量維持の目的から、内径 5m、深さ 5.6m の井戸を掘って給水ポンプを設置し、池の水位を検知する電気室を設けて、自動制御している。
3. ㊟池の先端三角水槽部㊟と小池㊟に循環水放流口を設けて、自動的に水量調整を行っている。
 - （1）㊟池の面積は約 471㎡、有効貯水量は約 330㎡
 - （2）㊟大池の面積は約 2,240㎡、有効貯水量は約 1,568㎡
 - （3）㊟小池の面積は約 629㎡、有効貯水量は約 447㎡

〔水源地の主な観察記録〕

1. 水源地フェンス内の㊟池中腹部分で、㊟T1 印の地点に直径約 0.73m のエノキ 1 本を確認。さらに㊟小池に近い㊟T2 地点に直径約 1m のケヤキ 1 本を確認した。
 2. ㊟大池には、鯉が群れ泳ぎ、カワセミを 1 羽確認。この時水温は 17℃ を測定確認。
 3. ㊟池では、メダカやアメンボが見られた。
 4. 野草類も多く見られ、タチツボスミシの群生などが印象的であった。
 5. 江戸時代上草柳村などの歴史資料などから知ることが出来る、水源地のほぼ中央位置に“亀甲山（かめのこやま）”と云う山が当時のマップ上に記載されている。
- ◇寒川浄水場浄水課の、鈴木さん、松本さんご協力有難うございました。

<高橋 昭安>

この記事は、なんでも情報館 No. 3 (2011年8月発行) に掲載されたものです。



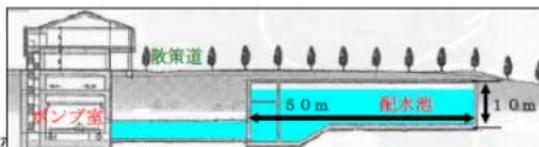
チェックポイント②: 配水池の上に立って 2万トンの水を想像する。

泉の森の水ものがたり —大和加圧ポンプ所と配水池—

鶴間の駅から西進して大和斎場・西鶴寺の前に来ると、大和加圧ポンプ所があり、その横の小道から泉の森に入ることができます。ポンプ所の裏手に広葉樹の人工林がありますが、その下に「配水池」があること、ご存知ですか？

1. できた経緯 —泉の森「水源地」との関係—

泉の森は引地川の水源になっており、いまでも大池・小池に地下水が湧き出ています。以前はその水を水源地周辺世帯に供給していましたが、付近の開発が進むにつれて水質が悪くなり、平成4年(1992年)に取水を中止し、相模川・酒匂川からの水が供給されるようになりました。そして平成12年(2000年)、綾瀬浄水場からの水を貯え、災害時の飲料水確保も目的に作られたのが、このポンプ所と配水池なのです。



2. ポンプ所は、毎日3万トン近くの水を大和市内3万3千戸に供給しており、市全体の約3分の1をまかなっています。その水を貯え、また災害時に市内全域への応急給水を可能とするため、配水池が設けられています。50m四方の面積で高さ10mの水槽に、水深8mで2万トンの水を貯えている…想像してみてください、ジンベエザメが悠々と泳ぐ、世界一大きい沖縄の「美ら海(ちゅらみ)水族館の水槽(7,500トン)」がふたつ半、足元にあるのですよ。

3. 私たちとの係わり

東日本大震災のような非常災害時、給水車がここに来てあちこちに給水することです。近くに住んでいる方は、ボットを持っていて、水を分けてもらえるそうです。

他地区の配水池は立ち入り禁止になっていますが、この配水池は泉の森の一部の扱いになっており、ロープと杭で仕切られています。中央の通路部分は入ってもかまわないそうです(フェンス囲いの中はもちろん立ち入り禁止)。でも、この下に大切な水があり、水源地の活葉林にもなっていますから、綺麗に保つよう心掛けましょう(伊藤健一)。



植樹されてから10年を過ぎ、とても綺麗になってきた配水池の上の広葉樹林

本記事につき、企業庁寒川浄水場および大和水道営業所の皆さんに教えていただきました。ありがとうございます。

この記事は、なんでも情報館No. 6(2012年6月発行)に掲載されたものです。

チェックポイント③: 水車小屋と田んぼを眺め、 中の構造・役割を知る。

水車小屋と田んぼ

水車が回って のどかな田園風景を醸し出し、横に小川が流れていて子供達の格好の遊び場。水車小屋は泉の森のシンボルのひとつですね。この水車小屋、単なるお飾りでしょうか？ いやいや、役に立っているのです。その秘密は隣にある田んぼ。ここで稲作りをしていて、秋になり刈り取った稲を、この水車小屋で精米しているのです。それでは、水車小屋の中の様子や、稲作りがどのように行われているかを紹介しましょう。

1. 水車小屋の中はどうなってるの？

しかしのいえ事務所にお願いして、小屋の中を見せてもらいました。太い車輪が横たわっており、外の車輪が回ると、この車輪が回ります。車輪に2箇所、十字に棒がついていて、杵を上を持ち上げストンと石臼に落ちる仕組みになっています。水車が回ると、二つの石臼に交互に杵が落ち、トントン、トントン…昔あちこちにあった水車小屋で、こんな音がしていたのでしょね。

2. 田んぼ

水車小屋の隣の田んぼ。昔、泥田だった泉の森の面影を残しています。この田んぼは5年ほど前に、水車小屋の有効利用の目的で作られ、以来毎年、稲作りが行われています。稲作りのリーダーは、民家園ボランティアの鈴木栄さん(大和市草柳在住)と小柳勝博さん(大和中央在住)。稲の苗は、鈴木さんが、遠く長野県佐久市の田んぼから持ってきて、ここに植えています。

稲作りの年間日程は以下の通りです。まず、春先に田起こしをして土の中に糞肥を供給し、5月に代掻き(雑草を除き土をかき混ぜて平らにする作業)の後、田植えをします。雑草を取ったり、育った稲の倒れ防止をしながら、10月初め頃、稲刈りです。刈り取った稲を民家園で天日干し後、11月初めの民家園秋祭りで昔の農機具を使った脱穀。そして11月末に水車小屋で精米を行うのです。

今年も例年通り、稲作りが行われる予定です。結構な重労働が多いので、作業しているところを見かけたら、声をかけて動まして下さい。水車小屋で精米が行われる頃、掲示が出ます。水車小屋の中を見ることが出来ますので、是非、見学に来て下さい。

【伊藤健一】



水車小屋の内部



田植え風景

この記事は、なんでも情報館No. 9(2013年4月発行)に掲載されたものです。

チェックポイント④: 八橋デッキ奥の側溝を眺め、水がどこから来るか考える。

泉の森の水ものがたり —引地川の第二の水源?—

しらかしの池の隣に側溝があり、八橋デッキの奥の排水トンネルから水が流れ出ています。この水はどこから来るのでしょうか? これを調べに大和市役所 都市施設部に行き、ご担当の方々にいろいろ教えてもらいました。

1. 普段は雨水や工場の冷却水

ここに来る水は、主に雨水や工場冷却水だそうです。正確には、右の図のように、国道246号の北側の地区の側溝から「雨水幹線」に集まり、これに工場の冷却水が加わって、泉の森の排水トンネルから引地川に流れているのです。

2. 大和市の下水道

家庭の台所やトイレ・風呂からの生活排水や工場排水などの汚れた水を「汚水」と呼び、「雨水」と合わせて「下水」と呼びます。汚水は浄化センターに運ばれて汚れを取り除いた後、境川に流されています。雨水は、汚水と別に流す「分流式」の地域と、汚水と一緒に流す「合流式」の地域があり、早くから下水事業に着手した大和駅や南林間駅周辺が合流式になっています。

3. 大雨のとき

合流式の地域の雨水と汚水が合流した下水は、合流管を通して浄化センターに行きますが、大雨で処理能力を超えると「雨水吐き室」から雨水幹線に流れ、泉の森に、雨水によって希釈された汚水が流れ出る可能性があることを知っておく必要があります。大和市では、この現状を改善するため、雨水吐き室からのゴミの流出を防ぐスクリーン設置を済ませ、さらに大雨のときに未処理下水を一時的に貯める「雨水滞水池」を建設したり、浄化センターへ送るための管(遊集管)の増強等の事業を実施しているそうです。

4. 川をきれいにするために

泉の森の湧き水だけでなく、私達の町から流れていく水も引地川の水源地なのです。町を綺麗にすることが引地川を綺麗にすることにつながりますね。(伊藤 健一)



凡 例	
	合流区域
	雨水幹線
	遊集幹線
	合流管
	雨水吐き室
	流出箇所

チェックポイント⑤: しらかしの池の役割を知る。

しらかしの池の生き立ち

今年も又、北の国から多くのカモがしらかしの池に渡って来ました。ヒドリガモ、キンクロハジロ、ホシハジロ、コガモなど。水面を悠々と泳ぐカモ、逆さまになってお尻を見せながら水草を食べるカモ、脚を踏ん張ってプレーキをかけながら降りるカモ、カモの様々な姿態が観られます。池にはカモの他にもコサギ、アオサギ、カワセミなど多くの野鳥が1年を通して集まって来ます。周囲を森に囲まれたしらかしの池は野鳥の楽園なのです。

では、この池はいつ頃できたのでしょうか。昔はどうなっていたのでしょうか。池は昭和57年、調整池として造られました。その時、西側の堤防や水門も造られています。都市化に伴い道路が舗装され山林は宅地が変わったため、大雨のときは雨水がそのまま鉄砲水のように引地川に流れ込んでくるようになったのです。そのため洪水にならないよう、一旦、調整池に水を貯め勢いを緩めたうえで下流に流すようにしました。大雨のときはしらかしの池だけでなく周囲は一面水浸しになってしまいます(下の写真)。しかし、この池の存在が下流の洪水を防止しているのです。堤防の上に植えられた桜は樹齢30年を数え、春には見事な花を咲かせます。しらかしの池は人間にも野鳥にも優しい池なのです。

昔はしらかしの池のあたりは引地川の水を利用した水田でした。水が冷たいため米の出来があまり良くない上に、一部は胸まで漬かるような深田だったそうです。現在、池の東に鬱蒼とした林がありますが、以前はそこに米作りの農家が数軒ありました。しかし、厚木基地の米軍機が何度も墜落事故を起こしたため、昭和35年から39年にかけて国に緩衝地帯として収用され、家を撤去した後は樹木が植えられ現在の林になっています。しらかしの池は色々な事件や歴史を呑み込んで、今日までの優しい素顔を私たちに見せてくれます。(橋本 幸夫)



大雨の後、水車小屋前まで水浸し。

本記事を書くにあたり、大和市都市施設部パンフレット「大和市の下水道」を参考にしました。

この記事は、なんでも情報館No. 8(2012年12月発行)に掲載されたものです。

この記事は、なんでも情報館No. 8(2012年12月発行)に掲載されたものです。

草柳園の魚供養塔

しらかしの池の向こうに草柳園があります。ヘラブナ・コイ・ニジマスや金魚・チョウザメを飼っている釣堀です。入口の駐車場の近くに「魚供養塔」があり、裏側に草柳園ができた経緯が刻まれています。その内容と、草柳園の社長の二見保之さんへ伺ったお話を紹介します。

1. 草柳園ができた経緯

昔、このあたりは上草柳村はのどかな田園でした。しかし戦後、米軍厚木基地ができ、墜落事故（特に昭和39年の館野鉄工所墜落事故）が相次ぎ、滑走路延長にある土地は園に収用され、民家は移転しました。

昭和43年正月、養殖と料理を学んだ先代の二見保之さんがここで井戸を掘り、地下60m付近の固い石砂利層付近に豊富な水脈を見つけ、水質検査を行って質も良好であることを確認しました。そこで近隣地主さんの協力で土地を確保し、同年8月に工事を始めて翌年6月に完成したのが、この釣堀なのです。もともと深い泥田の地を井掘りで堀にしたとのこと、さそやの労苦が偲ばれますが、先祖代々の上草柳の地名が消え去ることがないようにと草柳園と名付け、ユートピアを願う思いが碑文に記されています。

2. 現在

園内を掘が通っていて引地川に繋がっています。これがももとの引地川流路とのことで、今は釣堀からの水が流れています。草柳園の地下水は、災害時指定水源にもなっており、引地川の第三の水源にもなっているのですね。

園内には食堂もあり、釣りをしなくとも園内散策・食堂利用はOKとのこと。私達も良事をしました。各種メニューがありますが、さすがに養殖魚の料理が多く、草柳丼（900円）を選んだらニジマスの唐揚げと野菜天婦羅が乗った天丼：おいしかったです！
 草柳井を堪能
 泉の森の鳥さんたちもときどき釣堀の方に食事？に来るそうです。（伊藤 健一）
 （参考：草柳園は元旦と木曜日が休園。食堂は11時から）



魚供養塔



釣堀に注ぐ地下水



草柳井を堪能

「三分一」ってなあに？

親水広場の小高い丘の上、グリーンアップセンターのすぐ近くに「ここでは武田信玄の三分一（さんぶいち）の考え方を利用して水を三つに分けています」との説明板が立っています。

最近では親水広場に水が流れていることがないので何のことだか分かりにくいのですが、調べてみると、戦国時代に、武田信玄が、水争いが絶えなかった3つの村に公平に水を分けようということ、水路に三角形の石柱を置いて水を三等分したという伝説があります。現在でも八ヶ岳南麓に「三分一湧水（さんぶいちゆうすい）」という史跡が残っています。そこは水量豊富で日本の名水百選にも選ばれているところですが、確かに、山からの水が三方の水路にうまく分かれて流されています。親水広場の「三分一」にも三角形らしい石が中央に鎮座しています（下の写真）。けれども肝心の水が流れていないので見ただけでは何がなんだか分かりません。

この親水広場の水は井戸からの汲み上げ地下水で、ポンプで循環させる仕掛けになっているそうです。その井戸もある会社社長が寄付したのですが、最近では不具合のため使われていません。親水広場にはサイフォンの原理を利用した深さが変化する3つの池や、石組みの立派な滝などがあり、水が流れていればもっと楽しい、遊べる、素晴らしい広場になると思うのですが、今のままでは宝の持ち腐れで、もったいないことだと思うのは私だけでしょうか。
 （橋本幸夫）



チェックポイント⑦: ふれあい広場の成り立ちを知る。

＜寄稿＞ ふれあい広場 引地川・自然の復活 飯塚 栄子 (しらかしのいえボランティア・柳部会)

3月は、木々も葉を落とし一面茶色のふれあい広場ですが、春の桜、新緑の緑、真夏には草木が緑を競いあい、一年を通じて自然豊かな大和市民の憩いの場となっています。ふれあい広場の自然に囲まれながら、ゆるやかに蛇行して流れているのが引地川です。引地川は泉の森に源流をもち、相模湾まで流れている川です。今は、清流をたもち、夏には子供たちの恰好の水遊び場となっていますが、今から25年前は、コンクリート護岸の真っ直ぐな川だったということをご存じでしょうか？

ちょっとタイムスリップしてみましょう。25年前の引地川は3面コンクリート護岸で固められ、生活排水が流れ込み悪臭が立っていました。大型ごみも捨てられドブ川と化していました。しかし幸いなことに、現在のふれあい広場周辺には、まだ斜面緑地が残されていました。

1989年、大和市による、ふれあいの森の公園整備の話が持ち上がった折、「緑や自然景観を残した公園整備をして欲しい」という市民の声があがりました。その市民の声を受け、大和市は3面コンクリートをはがし、近自然工法による河川整備を行いました。当時コンクリート護岸が主流の中、あえて、3面コンクリートをはがし、柳をつかった自然護岸を創設したのです。これは日本の都市河川では初めての事例であり、引地川のふれあい広場は、実は全国的に注目されているスポットなのです。こうして1993年3月ふれあい広場が誕生したのです。



3面張りのコンクリート護岸



コンクリートを剥がし、
緩やかな流れを創出



柳が定着し、緑に囲まれた
水辺が生まれた

この記事は、なんでも情報館No. 5(2012年3月発行)に掲載されたものです。

直線的なコンクリートの護岸が、ゆるやかに蛇行した柳による護岸に生まれ変わりました。しかし、柳は生きていますから、剪定したり、補植したり、下草を刈ったりする必要があります。「市民の要望がかなって生まれた自然護岸なのだから、市民の手で守り育てていこう」と1995年、柳の手入れをする市民グループが生まれ、現在まで活動を続けています。

さて、自然護岸になったことで引地川にどのような変化が起きたのでしょうか？コンクリートで固められた護岸には草はあまり生えませんが、土の護岸になったことで、水草や岸辺にも草が繁茂し、生き物たちの産卵場所や隠れる場所が生まれました。土や草による自然浄化作用が進み、水も少しずつ清流を取り戻していきました。工事着工前の魚類調査では、メダカ1種類しか確認できなかったのですが、1995年には4種類、1996年には8種類が確認されました。現在も調査を継続的に行っていますが、アブラハヤ、オイカワ、ヨシノボリなど毎年8種類から10数種類の魚類が確認されています。昨年は、なんとアユも確認されました。テナガエビなどのエビ類も増えています。



アユ (写真: 日田恒二さん)

ほかの生き物はどうでしょう。コンクリート護岸で、どぶ川だった時は、幼少期を川の中で過ごすトンボも命をつなぐことができずでした。清流を好むハグロトンボは、大和市で一度絶滅したと記録されています。ところが、自然護岸ができた翌年、ハグロトンボが1頭確認され、今では群れて飛ぶ姿を見ることが出来ます。他のトンボも確認できる種類が年々増えてきています。



ハグロトンボ

このようにして、ふれあい広場の引地川は、行政の努力と市民の活動、そして自然の生きる力によって、25年の間にどぶ川から、生き物たちでにぎわう川に生まれ変わりました。生き物が息づく、人間にとっても心地よい場所でありつづけるためには、清掃、草刈、剪定、補植、調査など継続的な活動が必要です。自然護岸を守る活動や調査活動は、誰でも参加できます。これからもみなさんと一緒に、みんなの憩いの場、ふれあい広場を守り育てていきたいと思えます。

泉の森から引地川を下る (その1)

引地川は泉の森を源流として相模湾まで21.3 kmを流れ下る川です。同じ相模湾に流れる川は、たとえば相模川(109 km)は山中湖を、境川(52.1 km)は城山湖を、花水川(金目川 24 km)は大山やピツ峠付近をそれぞれ源流とするのに比べ、郡会の公園に水源があるのはとても不思議なことです。

これまで“なんでも情報館”では、No.3で水源付近を紹介し、またNo.8では、大和市北部地域の雨水や工場冷却水も引地川に流れ込むこと、さらには隣接する釣堀“草柳園”の掘り井戸からの地下水も第三の水源になっていること、を紹介してきました。そして、No.5では、25年前、3面コンクリート護岸の真っ直ぐなドブ川だった泉の森のふれあいの森周辺が、緩やかな流れの柳を使った護岸に変わり、緑に囲まれた水辺の自然復活の物語が述べられています。

河川清掃の市民ボランティア活動も活発に行われ、下水道も整備されて随分きれいになってきた引地川。さて、泉の森を出て、どんな風に流れて行くのでしょうか？ 今回は、泉の森から河口まで、引地川沿いを自転車で辿っていった様子と、実際に川の中を川面の目線で見ていくためのカヌー川下りの試験漕行の様子を紹介します。

1. 引地川沿いを自転車で下る

〈1〉 藤沢市との境まで： 泉の森を出発し、横浜銀行グランドの横の細道を辿り、環境管理センターを経て、千本桜に至ります。言うまでもない桜の名所。何箇所かに親水護岸があって、子供たちが水遊びをしています。



3/29 福田小学校前



取水が行われている若宮堰を過ぎ、新幹線をぐるあたりから田畑が目立つようになります。

(2) 藤沢市の引地川中流部： 藤沢市に入ると真っ先に大きな水門が目立つ長後堰があり、田園地帯を経て綾瀬市に源を発する夢引との合流地点にきます。その下流の下土棚地区(川地図のA)では大規模工事が行われており、後で調べたら洪水を防ぐための遊水地整備の10年計画の5年目のようで、湘南台までの川岸にスポーツ施設や親水広場などの各種施設ができるとのことです。

そこを過ぎ、住宅地の間を狭い垂直護岸で囲われて流れる引地川がかわいそうに見えますが、一転、大庭に至ると引地川親水公園(川地図のB)に出ます。川岸にアシが生える広々とした公園で、厚木飛行場を飛び立つ編隊ジェット機のように、2羽のカワセミが一列に並んで飛翔する様を見ることができ、嬉しくなりました。

(3) 藤沢市の引地川下流部：

国道1号線・東海道本線をくぐった先の長久保公園のあたりは汽水域になっていて、子供達がボウ釣りしています。また藤沢カヌー協会のカヌー訓練も行われており、子供達が一生懸命、漕いでいました。溝沼橋の先に河口があり、江ノ島と対面です。



6/9 引地川河口

2. 引地川をカヌーで下る (試験漕行)

私も引地川で漕いでみたくなり、ふれあい広場からカヌーで出発しました(表紙写真)。少ない水量でどの程度漕げるか、千本桜の福田小あたりの1mぐらいの堰(左の写真)を越えられるかを試すのが目的です。

結論から言うと、半分はカヌーを引っ張って歩いた。特に横浜銀行グランド付近まで川面一杯に繁茂するアシやガマには降参。1m堰は越えられた。です。今回は、千本桜「福田小」下で終わりにしましたが、折々にチャレンジを続ける予定。何かしたい方、一緒にやりたい方、歓迎です。

(伊藤 健一)

泉の森から引地川を下る (その2)

前回、なんでも情報館No.10で、源流から河口まで引地川の川べりを自転車で行き、またふれあい広場から千本桜までカヌーで下ったことを紹介しました。今回は、引き続き、千本桜から河口まで、2回にわたってカヌーで漕ぎ下った様子を紹介いたします。初回は一人で下りましたが、2回目からは泉の森ボランティア仲間、環富智男さん(私と同じく西鶴間在住)と一緒に。私のかみさん、千代ちゃんが車で伴走してくれました。

1. コース紹介: 引地川の“断面”

No.10に引地川の概略地図を載せていますが、今回は、源流から河口までの標高断面図(下の図: ガミール 3Dにて作成)をもとにコースを紹介いたします。

初回出発地点のふれあいの森は、源流の大池やしらかしの池と同様、標高50m弱。参考までに断面図左端に西鶴間6丁目の標高を入れましたが、そこは標高70m。引地川源流部は、周りに200mも窪んでいて、昔は林や農地ばかりだったところから水を集めて湧き出していたことが、なんとなくわかるような気がします。

さて、初回は半分くらいカヌーを引っ張って歩きましたが、2回目は3割方歩き、3回目は、ほとんど歩かず漕ぎ下ることができました。水面に浮かぶのは気持ち



千本桜 福田小下の親水園から2回目スタート(9/19)

がいいもので、時々、通りすがりの方が手を振ってくれます。水は、大体綺麗です。下流になるほど透明度は落ちてきますが、ヘドロ臭のようないやな臭いはありません。引地川を綺麗にする活動を続けてきたボラソニア団体や、下水道・治水整備に携わる行政の皆さんに感謝したくなりますね。

2. 川のかたち

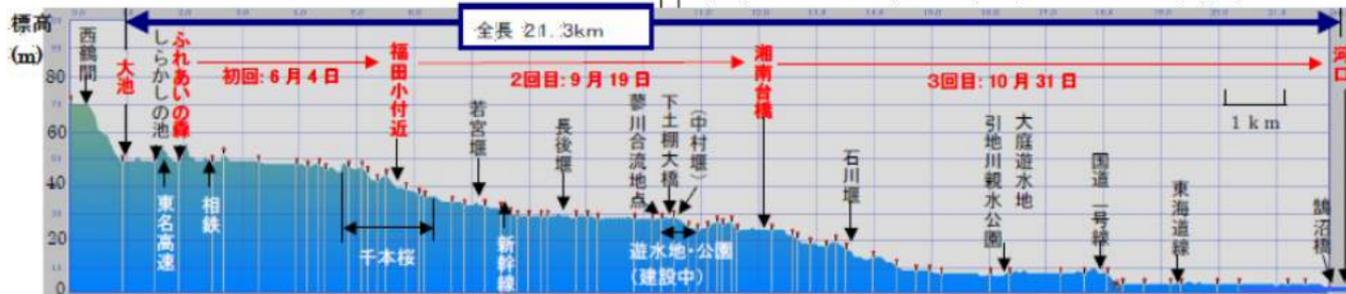
川を下っていて目立つのは、落差工や堰です。千本桜付近に2つ、段差1mくらいの落差工がありますが、これは川の流れの勾配をゆるくするためのものだそうです。

その下流に農業用水を取水するための堰として、大和市に若宮堰、藤沢市に長後堰・石川堰があります。後日、藤沢土木事務所河川砂防第一課に伺い、いろいろ教わったのですが、今回は長後堰(右の写真)について触れます。

以前は川底からゲートが起伏して水を止め、



取水する方式でしたが(旧長後堰)、ゲートは外されて新たにゴム堰(ゴム布引製のチューブを膨らませて水を貯める)方式の新長後堰が2年前にできたそうです。ゴム堰の横には魚道も作られており、石川堰の魚道も含めて、魚さんたちは、ここまでは容易に來れることになるのです。そしてまだ残っているのが、旧長後堰の15m程の段差...大和市内の引地川で、以前、鮎が見つけれられたようですが(No.5参照)、ひょっとしてその鮎は、この段差を飛び越えたのかも知れません。若宮堰・石川堰も面白い構造になっていますが、紙面の関係で書き切れません。各所にある遊永地・公園の話とともに、後日、紹介することにしませう。(伊藤 健一)



チェックポイント間の距離と所要時間の目安

	距離(m)	所要時間(分)	
		普通に歩く	廻りを見ながら のんびり歩く
しらかしのいえ→①野鳥観察デッキ	350	6	10
① → ②配水池	400	7	15
② → ③水車小屋	700	11	20
③ → ④排水トンネル	100	2	5
④ → ⑤しらかしの池	200	4	5
⑤ → ⑥草柳園	200	4	5
⑥ → ⑦ふれあい広場	650	10	20
⑦ → ⑧親水広場	300	6	10
(合計)	2900	50	90
⑧ → 大和駅	900	15	
⑧ → 相模大塚駅	1200	20	
② → 鶴間駅	1450	25	
⑧ → 引地川河口	(20km)		(2~3日)

×モ